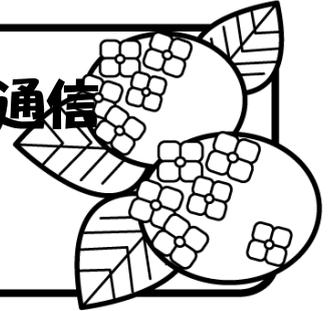




青木村子どもはつらつネットワーク通信

平成27年度 第117号 6月1日

青木村子どもはつらつネットワーク事務局発行



第11回 あおきっこ合宿

今年度のあおきっこ合宿は、5月10日(日)～16日(土)の6泊7日文化会館で行われ、小学4年生から6年生の希望者54名(4年生から6年生の約半分)と信州大学教育学部などから学生27名が参加しました。

テーマは「**Wa!!**」です。合宿のはじめの会で教育長が、「周りの人の気持ちを考える合宿にしましょう」と子どもたちにお話しされました。終わりの会の時には「みんな100パーセントできたと思います」とお褒めの言葉をいただき、友だちや学生さんと助け合いながら過ごせた充実した合宿になったようです。

くつろぎの湯が利用できない月曜日は、下形文幸さん、上原昌子さん宅やラポート青木へもらい湯に行かせて頂きました。夕食の準備は一般ボランティアの方々と一緒に行いました。小学校の先生方、保護者の皆さん等大勢の方々のご支援により、無事に終わることができました。

.....
合宿をとおして、子どもたちの成長した姿や新しく発見した良い面、感じたこと
.....
などを大学生の皆さんにお聞きしました。その中の一部を紹介いたします。
.....

★始めはバラバラだった班が、日が経つにつれみんなでの会話が増え、お互いに注意し合う姿が見られた。最終日のパーティーでピザを作る時に、班長が「みんなで協力しないと楽しいパーティーにならないよ！」と班のみんなをまとめている姿が見られ、班の中でのつながりが合宿によって生まれた。

★班の子どもが2人欠席していた時、班の子どもの一人が、「全員そろわないと寂しいし、あの2人がいないとつまらないね」と言ったことが、今回のテーマである「Wa!!」とつながり、班の中でつながりの「Wa!!」が作られているのだと思った。

★私は今回、食事係を任せられ、ほとんど調理室にいました。なので班別自由行動やお風呂の時間という一番子どもたちと関われる時間に一緒にいられませんでした。最初は私自身、そんなに関わらずに、おいしいご飯を作っていればいいかなと思っていました。

しかし、子どものリフレクションノートに「〇〇ともっと話したい」「〇〇と遊びたかった」「明日は〇〇ちゃんと話しをする」と書かれてあり、すごく嬉しい気持ちと申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。子どもが関わり、つながりを持とうとしているのに、私の方から閉ざしていた部分がありました。係の仕事も大切だけど、班の子たちとの時間もできるだけ多く作って精一杯関わっていくことが大切なんだと気づきました。パーティーの時は「〇〇の隣がいい！絶対！」と、普段あまり自分の意見を出さなかった A さんが言ってくれたようで、いつもの席順とは違い、私と A さんは隣でした。班活動の時に全くいられない私を温かく迎えてくれ、沢山の話を聞かせてくれる、あおきこたちの優しさに何度も救われました。



★私は今回 2 回目の参加でした。その中でも印象に残った子が 2 人いて、1 人は去年、ほぼ班活動には参加せず、単独行動をとっていた子です。今年も参加してくれることを知り、どの班付学生をつけるべきかとも考えました。しかしその子は今年の通学合宿では、ほとんど班に交じって活動していたので、すごく感動しました。1 週間活動するにつれて、班にいる時間も長くなり、合宿を通して成長を見ることができたと思います。もう 1 人の子は、私が去年班付をしていた班の子で、その子はフリータイムで宿題よりも先に遊びたいという思いが強い子でやらせようとするとうぐれてしまう子でした。今回もその子の宿題を 2 回ほどみていましたが、今回は遊びたいと言いつつも、毎日最後まで終わらせてから残りの時間で遊ぶという姿を見ることができたのでとても感動しました。



★合宿開始の頃は男の子と女の子が別々で、班のまとまりがなかった。行動の様子を見ていると、男の子では 2 人、1 人、1 人で、女の子でも 3 人、1 人といったように性別に分けたグループ内でも多少の分裂が生じて、学生たちは不安を感じていた。その不安を元に対策を考えて、まずは性別内でまとませようとして、班で使用して

いる席の席替えを毎日行うことにした。そうすることで班の他の人との会話やコミュニケーションを促すことができるのではないかと考えたからだ。変化が見られたのは、折

り返しが過ぎた水曜日。男の子は男の子たちで、女の子は女の子たちで夕食の配膳の指示を出していた。極めつけは金曜日のパーティーである。パーティーの前のレクでもパーティーで起こった出来事の傾向が見られてはいたが、パーティーで班の協力の輪が完成したのである。学生の指示、回数も減少し、子どもたちだけの判断で箸を並べたり、お茶を配ったりすることができた。こうしたまとまりを成長と感じた。



★今回は2回目の通学合宿で、昨年からの子どもの成長が大きくて驚いた。学生の言うことを聞かないやんちゃな4年生が、今年は5年生になって、学生の言うことをしっかり聞き、年下の4年生のお世話をする姿が見られた。通学合宿の1週間でも子どもの成長はみられるが、1年を通してみることで、こんなにも成長するのだなと思った。通学合宿で1番印象的だった場面は、保護者からの手紙を

読む子どもたちの姿です。保護者からの手紙を読んで涙する子、泣くのを我慢しながら真剣に手紙を読む子、何度も何度も手紙を読み返す子、そんな子どもの様子に私は感動しました。親からの手紙を読んで涙を流すことができる子、何かを感じることができる子は本当に素晴らしいと思います。1週間の合宿を終え、最終日の夜に手紙を読むことで、より一層親のありがたみや感謝の気持ちを感じることができたのではないかなと思います。手紙を読む子どもたちの姿を見た時に、通学合宿をしてよかったなと思いました。

★班長のBさんが班会で、タイムスケジュール、係会で決めたことを話す際、みんなの表情を見て「〇〇ちゃんある？」と聞いている姿が見られました。表情やふとした仕草に着目できるようになっていました。食器洗いは、最初はなかなかやらない子どもがいたが、食器を洗う人、流す人、拭く人に分かれてやることができるようになりました。「自分は〇〇を担当する」ということが自分で表現できるようになったことが、子どもの成長で見られました。また、4年生のCさんは、一度シンクの掃除をしたら、それからいつも食器を洗った後に、シンクまで掃除をされていて食器だけでなく使った場所をきれいにすることが責任であり、“食器洗い”と認識していたかと思います。周りの子たちは食器を洗うという中で、そのあ



とまで責任をもつということは素晴らしいと思います。配膳は自分が配らなくても誰かしらが配るという認識から、なかなかやってくれませんでした。きっと家でもう配膳までしてあるのだと思います。ですが、日にちが経つにつれて、自分の班や他の班に配るだけでなく、いくつ足りないのか、何が足りないのかという面にも注目できるようになりました。レクリエーションでは、その子どもの特質や得意、工夫に合わせて、リレーの順番を工夫したり、「こうやるんだよ」とアドバイスしたりする姿が見られました。

★毎日、夜の班会で書いていたリフレクションノートでは、普段ツツツンしている子どもも、「友だちのいいところ」というスペースに、「〇〇さんが～してた」のような、友だちのいいところを見つけていて、しっかり友だちのことを見ているんだなと感じた。

★5年生のD君は、普段の企画などから、集団行動があまり得意というわけではなく、一人行動が目立っていた。一人行動といっても自分のことはしっかりとやり、皿洗いなどはテキパキやっていた。そんなDの姿を見た4年生のE君は憧れを感じたのか、2日目からDのまねをするようになった。Dが食事後すぐに自分の皿を片付け始めると、Eもその後をついていった。その姿はまるで兄弟であった。学校での2人の姿を知っているわけではないが、D自身も弟ができたようで、初めての関係をもって少し誇らしい顔つきであった。DはEがついてくるようになって、他の下級生に注意するようにもなった。



昨年12月に行われました倉澤誠先生の講演会の続きを掲載いたします。

倉澤 誠先生の

子育てで大切にしたいこと

Part 3

《前回までのお話》

「やさしい思いやりのある子」「何事にもへこたれない強い子」「良い悪いの判断が自分でできる子」「人に好かれ友達の多い子」を育てるには子ども自身の気持ちの安定が必要です。

そのための一つとして 1.「自信を持つ」ということが重要です。子どもに自信を持たせるための大切なポイントとして①できるようにする、②ほめる、があります。

二つ目のポイントとしては、2.「自分は大事にされている」という気持ちです。子

どもがそう感じるためには ①叱り方に注意したり、②気持ちをくむように話を聞くこと、③手のかからない子に対する注意や、必要な時期に ④甘えさせることが大切です。

.....

3、自分はあてにされている

気持ちの安定のための三点目は、自分はあてにされているという気持ちを持てるようにすることです。

① 年代を越えたつながりで得られる

5歳児の例をお話します。D君はみんなでゲームをして負けると大暴れをして大変でした。椅子を投げたりスリッパを投げたり。「もう一回やる！」と言うのですが、周りの子たちが引いてしまって付き合ってくれないと、部屋から出ていったりしてさらに大変でした。当然先生の注意は多くなりますし、周りのみんなも「D君は困った子」と離れていってしまいます。あるときD君が未満児の教室に行ったことがありました。その時その担任の先生が「ちょっと着替えを手伝ってくれる？」とD君に言ったんです。そこでD君は靴下を履かせてあげました。未満児の先生は「〇〇ちゃん、すごく喜んでよ」って褒めてあげました。そうしたらD君は「また言ってよ。手伝うから」とうれしそうに帰っていきました。それを見た担任の先生と未満児の担任の先生は両方のクラスで交流をすることを計画しました。当日、D君は既に未満児の世話をしたことがあるという経験により、自信を持ってみんなをリードするような気持ちで一生懸命面倒を見てあげていました。何回か続けるうちにD君は見違えるように変わっていききました。とても落ち着きました。5歳児は5歳児なりに、ひとにあてにされる、ということは分かるんです。あてにされるからさらにやるんです。

小中一貫教育の良い点はこのところにあると思っています。年下の子は年上の子の活動を見てそれをお手本にしていきます。人との関わり方や遊び方のイメージを作っていきます。年上の子は年下の子に頼りにされる、認められる、そして自信をつけていきます。子どもたちの心を豊かにする、というところにつながっていくと思います。ある本によりますと、このような交流は、歳が離れていれば離れている程いいそうです。たとえば小学3年生と4年生よりも、中学3年生と小学2年生とかの交流のほうがよいようです。

② 自分は人の役にたっている

「自分は必要な人間だ」とか「私には私のことをわかってくれる人がいる」という気持ちがあれば、少しぐらいの挫折は乗り越えることができます。自分に自信があるから少しぐらいのことは乗り越えられるんですね。逆に「あなたはダメだ」と言われ続け、そこで失敗しようものなら「結局、俺はダメか」という受け止め方になってしまいます。

ですから自信をつけておくことは、これから子どもたちが育っていくうえで非常に大事なことだと思っています。

4、まとめ

思いやりは、自分の気持ちが安定していれば思いやる気持ちが出てきます。思いやりのある子は友だちからも好かれます。

はじめに「やさしい思いやりのある子に育て欲しい」という親の願いが多いとお話ししましたが、それにはやはり、大人がやさしい思いやりのある言葉がけや接し方をしなければいけないと思っています。『子どもが育つ魔法の言葉』（ドロシー・ロー・ノルト著、PHP 出版）と言う本がありますが、その中にも「やさしく思いやりをもって育てれば、子どもはやさしい子に育つ」とあります。

最後に仏様と男の話をしたと思います。

ある時、荷物をいっぱい積んだ荷車が通ります。その荷車がぬかるみにはまってしまい、男が一生懸命引いても抜け出すことができずにいました。男は汗をびしょりかいて苦しんでいます。仏様はそれをしばらく見ていたのですが、やがてちょっと指でその荷車に触れられました。すると荷車はすっとぬかるみから出ることができました。男はカラカラと車を引いて去っていきました。男は仏様のことは知りません。自分の力でぬかるみから抜け出ることができたと思っています。

私はこのことは指導する者の役割を示しているように思います。いつも先輩からそう言われてきました。ですから実はこれは受け売りなのですが、自分ではそのようにずっと努めてきたつもりです。子どもたちには「自分ができるようになったのは指導してくれた人のお蔭」と思わせるよりも「自分が頑張ったからできた」「自分が努力したからできた」「自分がここを切り開いてきた」という自信を持たせたいと思っています。指導した者の存在はきれいさっぱり忘れ去られてもいい、そうならなければいつまでたっても子どもは自立することができません。一人で生きていくことができる自信をつけることが指導する者の役目だと思っています。自分ががんばったからできた、という自信が生きる力になるのです。

ただ、指導する者と親とはまた違います。親はいつまでたっても子どもが心配なものです。しかし指導する私たちは、子どもが自立できるよう仏様のように後ろからそっと支える存在でありたいと思っています。



編集後記

青木村出身の大学生が今年は 2 人来てくれました。自身が小学生の時に合宿に参加した方もいます。成長して、青木の子どもたちと関わる活動をしてきていることをとても嬉しく感じています。